

第5章

高島の歴史と文化財



高島の位置

この地域の小中学校

小学校: あいのうら相浦小学校高島分校

中学校: 相浦中学校

第5章 高島の歴史と文化財

火山と砂丘の島

高島は、相浦の港外約6キロメートルの海上にあります。西海国立公園・九十九島に含まれている、南北3.5キロメートル、東西は最大で900メートルの細長い島です。

1日に往復3便のフェリーがあり、相浦港と約20分で連絡しています。高島の集落は、島の南側にある番岳(標高136メートル)の麓の砂丘を中心に広がっており、島の北半分にはほとんど人は住んでいません。



高島航空写真



高島の地図



番岳

高島は、島の成り立ちからして特徴的です。今から約13,000年前より古い時代は、氷河期と呼ばれ、現在より平均気温が5度ほど低く寒い時代でした。海面は今より約90メートルも低く、高島付近は見渡す限りの山々だったのです。そうしたなか、時期は分かりませんが、地面を破って溶岩が噴き出してきました。火山の噴火です。噴火といっても爆発的な噴火ではなく、溶岩がじわじわ盛り上がっていく緩やかな噴火だったようです。そして、その溶岩が小高い丘となつて、番岳となりました。

その後、暖かくなつて海面があがり、今の島の形となりました。そうすると、北の島と南の番岳の間が狭い海峡になり、ここに砂や石がたまって砂丘ができ、¹陸続きになったのです。今、港と高島分校の間に広がる畑がその砂丘です。

1 このような現象を「陸繋島」といい、佐世保市内では、黒島の女瀬(申ノ浜)や浅子の立石崎などにも見られる。

宮ノ本遺跡

この砂丘は、人が暮らしやすかったようです。約7,000年前の縄文時代前期から人の住んだ遺跡があります。

遺跡は「宮ノ本遺跡」と呼ばれています。弥生時代の墓地からは、40体もの人骨が発見されています。このほかに、家の下に埋まっているものや、発掘していない墓地を加えると、100体以上の埋葬があるようです。

当時の島の暮らしはどのようなものだったのか、出てきた石器や土器、そして人骨などから復元してみましょう。

縄文時代の始め頃は、砂丘に簡単な小屋を建てて住んでいたようです。そして、主に漁や狩猟、採集によって食料を得ていました。



発掘中の宮ノ本遺跡



宮ノ本遺跡3号石棺

縄文時代も終わり頃になると、これまでの漁業や狩猟、採集に加えて、広い砂丘に畑を作っていたようです。遺跡からは、鍬として使われたと考えられている打製石斧が多く見つかっています。

弥生時代になると、さらに農耕が盛んになるようです。稲の穂を摘む「石包丁」が発見されていますが、砂丘は水田に不向きですから、陸稲やアワ、ヒエなどの雑穀を栽培していたと考えられています。

また、墓地に葬られた人のなかで、左腕に沖繩付近の海でしか採れない、イモガイで作った貝の腕輪を着けた女性の骨がありました。他の女性は、この付近でも採れる普通の貝の腕輪ですから、この人はムラのなかでも特別な存在だったと考えられています。

かいみち
貝の道

弥生時代は、沖縄などに棲む南海産の貝が腕輪など装身具の材料に使われています。宮ノ本遺跡の3号石棺に葬られた女性は左手にイモガイの腕輪を付けていました。このイモガイは沖縄の各地の遺跡で、海から採ってきて1ヵ所に集めた状態で出土しています。

宮ノ本遺跡のイモガイの腕輪は、そのイモガイを材料として、輪切りにして、さらに縦4個に分割する特殊なものです。このタイプの腕輪が北海道の遺跡からも、やはり埋葬された人の骨とともに出土しています。



イモガイの腕輪をつけた状態

北海道有珠モシリ遺跡出土
※写真提供：伊達市噴火湾文化研究所



北海道
有珠モシリ遺跡



イモガイの腕輪(宮ノ本遺跡)
佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵



佐世保
宮ノ本遺跡

沖縄県
津堅貝塚



イモガイの集積状態

沖縄県津堅貝塚
※写真提供：うるま市教育委員会

以上のことから、沖縄で材料が集められ、島伝いに船で運ばれ、九州でいくつかのルートに分かれるなか、九州の西沿岸に沿って宮ノ本遺跡を中継して、日本海沿岸をはるばると北上して、ついには北海道まで運ばれたことを物語っています。

このことから、九十九島など佐世保の海岸に沿って、腕輪の材料となる貝を運ぶ、距離にして2,000キロメートル以上にも及ぶ壮大な海の道があったと考えられます。

遠見番所ができる

弥生時代からは、歴史的記録はないようです。江戸時代になると、山口村(現在の相浦)の一部として古文書に「高島」の名が現れてきます。

江戸時代の平戸藩は、藩内に多くの離島と広大な海域を抱えていました。平戸藩にとって、海の警備や見張りは重要な役目だったことから、沿岸部や離島に遠見番所を築きました。遠見番所の主な役割は、密貿易の取締り、漂流者の発見と救助、そして外国船に対する見張りでした。つまり現在の海上保安庁のような役割を担っていたのです。この中でも、鎖国政策が進められていた当時は、外国船に対する見張りが最も重要な任務でした。平戸藩では、1640年(寛永17)に高島の番岳山頂に最初の遠見番所を設けました。

2 日本人が海外に出ることを禁じ、オランダなどの限られた国としか貿易を行わないこと。

番岳麓の集落のほぼ中央にある竹邊家は、代々遠見番所の役人を勤めました。母屋は新しくなっていますが、家の入口には役所の番人が詰めた長屋が残っています。番所には、鉄砲5挺や槍などの武器も備えられています。

また、番岳の頂上には狼煙場も造られており、外国船を発見したときは狼煙をあげ、早船で針尾島まで知らせることになっていました。



郷土の人～遠見番所最後の役人～
竹邊宗八(右)と長尾枚太(左)



竹邊家旧長屋

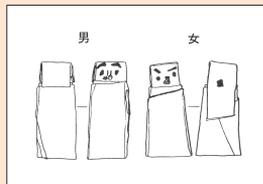
江戸時代の高島の人達の暮らしは、遠見番所の役人は別として、一般の人たちは漁業と農業を仕事にしていたようです。

また、島で亡くなった人は高島分校そばの墓地に葬られました。古い墓は整理されているため、いつ頃から埋葬が行われていたかは分かっていません。相浦町の洪徳寺に保管されている過去帳で確認できるのは、1713年(正徳3)が最も古いものですが、遠見番所が置かれたことから、もっと古くから島の暮らしがあったと考えられます。

コラム～島の信仰「オフナダサマ」～

「お船魂様」を「オフナダサマ」と呼ぶ。海上安全の神で、平らで簡単な木片に顔が描かれる。男女の神体のうち、女神は着物と長い髪が表現されている。

オフナダサマは「チー、チー」とサエラス(さえずる)という。時化のときは「ビー、ビー」と鳴き、漁師の肩について家まで帰ってくるという。また、大漁の時もチー、チーとサエラスという。島ならではの信仰である。



オフナダサマ

しまなが島流しの島でもあった

高島は、昔は罪人の遠島(島流し)の島でもあり、洪徳寺の過去帳に島で亡くなった罪人の記録が残っています。これは島の伝説としても語られ、宮ノ本遺跡からたまたま出てくる弥生時代の墓地の骨を、罪人のものと考えて「骨様」として大切に祀っています。また、番所の役人だった竹邊家の記録によると、島から逃げだした罪人もいたそうです。

また、黒島と同様に「寄人」の墓も番岳北側の海岸にあります。海で亡くなった人が流れ着き、島の人たちが埋葬したものです。



骨様



志賀神社

くじら鯨の記念碑

港近くの志賀神社は、鳥居に寛延4年(1751)の銘があり、高島の歴史を語る神社です。その境内に、鯨をかたどった石碑があります。1913年(大正2)に鯨が海岸に打ち上がったことを記念したものです。江戸時代は「鯨1頭で七浦が賑わう」といわれたくらい、その恩恵は大きかったです。高島も、この鯨のお蔭で大いに潤ったそうです。



鯨の記念碑



鯨に喜ぶ人々

イラスト: 栗山奉文

第2次世界大戦中には、番岳の頂上に³高射砲台が造られました。佐世保軍港を守るためのものでした。番岳山頂には聴音機跡と兵舎跡が、高島へき地保育所の裏には当時の発電所の建物が残っています。

3 飛行機を迎え撃つための砲台。

今の島の暮らし

現在の島の主な産業は、小型底引き網を主体とする漁業で、最近はカキの養殖も行われています。2013年(平成25)の世帯数は66戸、人口は187人であり、その多くが漁業に従事しています。高島の世帯数はあまり変化がありませんが、人口は減っています。各家庭の子どもの数が減少したことも原因の一つでしょう。

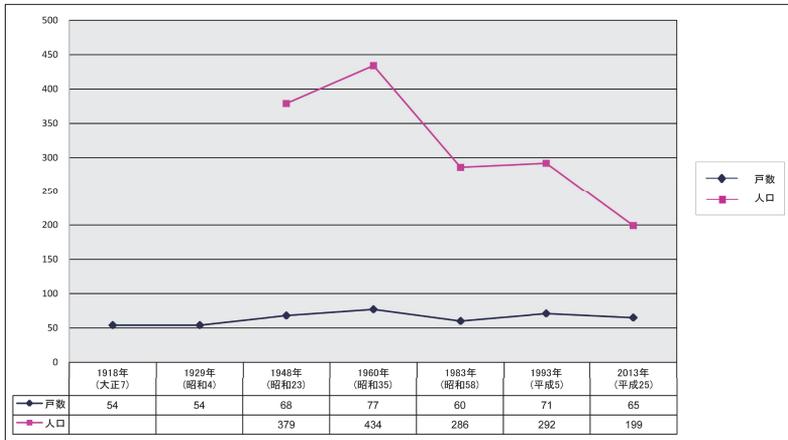


工場で作られる「高島ちくわ」

写真提供: 高島ちくわ加工所

島の特産は、「高島ちくわ」です。塩味がきいておいしいちくわで、エソを原料にして棧橋近くの工場で作られています。戦前は島の住民の約80パーセントがちくわやかまぼこ作りに関わっていましたが、現在では僅かに2軒を残すのみです。

以前は、左の写真のように炭火と団扇を使って手作業で焼いていましたが、現在では全て機械化され、500本焼くのにかかっていた作業が、1時間で済むようになったそうです。



人口と戸数の移り変わり

地域の年表

時代	出来事
縄文時代前期	約7,000年前 宮ノ本遺跡に人が住み始める。
縄文時代晩期	約2,500年前 宮ノ本遺跡で農耕が始まる。
弥生時代前期	約2,300年前 宮ノ本遺跡にムラができる。
江戸時代	
1640年 (寛永17)	高島の遠見番所が設置される。
1699年 (元禄12)	山口村 (相浦の旧名) に高島免がある。
1751年 (寛延4)	志賀神社の鳥居が建てられる。
近代	
1879年 (明治12)	山口小学校高島分教場できる。
1913年 (大正2)	海岸に鰐が打ち上げられる。
1930年 (昭和5)	山口村が相浦町に改称し、相浦町高島免となる。
1938年 (昭和13)	相浦町が佐世保市に合併、高島は佐世保市の一部になる。
現代	
1947年 (昭和22)	佐世保市立相浦小学校高島分校となる。
1977年 (昭和52)	宮ノ本遺跡の発掘調査が行われる。